

地形から考える芝公園と芝増上寺

—芝地域の理解の一助として—

高 山 優*

はじめに

1. 芝地域をめぐる地形環境
 2. 芝増上寺・芝公園周辺の地形環境
 3. 芝増上寺・芝公園周辺の地形から読み取れること
- おわりに

キーワード 地形環境 東京図測量原図 遺跡 考古学 空間観

はじめに

次頁に掲げた図は、明治17年（1884）に参謀本部陸軍部測量局が刊行した「五千分一尺 東京図測量原図 東京府武蔵国芝区芝公園地近傍」（以下、「東京図測量原図」とする）である。港区は、市街化が早くから進んだこともあり、細かな地形を知ることのできる地図にあまり恵まれていない。そうした中、本図は港区の地形を知る上で最も適当な一枚といえる。

本稿では、この「東京図測量原図」をテキストに、筆者が主として携わっている遺跡の考古学的調査に基づく知見を加えながら、地形に着目して芝公園と芝増上寺の在り様について考えてみたい。芝地域を理解する一助となれば幸いである。

1. 芝地域をめぐる地形環境

諸書に記されているとおり、武蔵野台地の東端に位置する港区は、西方に台地が広がり、北方から東方にかけて低地が展開し、さらにその東部の海浜部埋立地を経て東京湾に至る¹⁾。区の中央には古川がほぼ東西方向に流れ、区外にはなるが南には目黒川が北西から南東方向に下っている。また北端には、江戸城外堀として整備される溜池谷からの流れが存在した。台地には、これらの比較的大型の河川や、そ

* 港区立港郷土資料館学芸員

れぞれに流れ込む支流によって、あるいは海浜部に直接流れ込む河川によって谷が枝状に刻まれ、港区の地形は実は複雑な様相を呈している。こうした河川の影響は低地にも少なからず及んでいた。一方海浜部の埋め立ては江戸時代初頭から開始されたが、今日埋立地と呼ばれる土地の殆どは大正時代以降に成立したものである。それまでの汀線は、江戸のまちづくりの進展に伴い東進あるいは南進し、17世紀中葉には第一京浜国道とJRの最も陸側の線路との間に存在した。²⁾

また、徳川家康の入府に伴いまちづくりが本格化するまでは、江戸城足下まで日比谷入江が入り込んでいた。その開口部付近の東岸と西岸の一部が、近年の発掘調査によって検出され、さらには日比谷入江の造成の在り方が遺跡発掘調査によって解明されつつある。³⁾



図 五十分ノ一尺東京図測量原図 東京府武蔵国芝区芝公園地近傍
(部分 [筆者加筆]、国土地理院所蔵、日本地図センター複製、国際日本文化センター 画像提供)

ところで港区は、旧芝区・旧麻布区・旧赤坂区が昭和22年（1947）に統合されて成立した行政区画であるが、その東半域を占めているのが旧芝区である。石川秀和は『御府内備考』の記載を引き、中世に「金杉・本芝辺」を「芝」と称していたものが、江戸時代に入ると徐々に範囲が広がり、新橋以南から高輪付近までを「芝」と称するようになったとしている（江戸東京博物館「平成23年度東京都江戸東京博物館都市歴史研究室シンポジウム 芝地域を考える—愛宕山・増上寺・芝神明—」レジュメ、2012年）。さらに『御府内備考』には、増上寺裏手から土器町飯倉付近（現在の港区虎ノ門一丁目から五丁目）も芝の範囲であったと記されている。すなわち、港区成立前の旧芝区の範囲である。

そこで旧芝区の地形上の特徴を見ていくと、第一に、港区の最も東に位置する台地を背負っていること、第二に、港区内で最も沖積層低地が発達した地域であること、第三に、海に面していること、の3点に集約できよう。台地は、南から高輪台、三田台が連続して横たわり、高輪台の西方には白金台が延びる。芝公園付近は三田段丘の北端あるいは飯倉台地の東端とされる台地が南北方向に展開する⁴⁾。高輪台、三田台の標高は20～25m前後で推移し、その最北端に愛宕山が位置する。第二の沖積層低地は主として、かつての日比谷入江に相応する区域及びその周辺域、古川沿いに特に発達し、また芝公園が位置する台地（または段丘とも）直下から海手にかけて形成される。第三の点については改めて述べる必要はないだろう。ただ、例えば芝公園一丁目付近では、縄文時代から中世の遺物の散布が見られた砂礫層に陸上風化によると考えられる変色が観察されたこと⁵⁾、古川の南岸に位置する薩摩鹿児島藩島津家中屋敷跡で、3世紀に属する方形周溝墓と考えられる遺構が検出され、周辺域では少なくとも弥生時代終末から古墳時代初頭には人々の活動領域となり得る地形環境であったことが確認されていることなどから、芝地域の陸化が思いのほか早くから進んでいたと考えられることを付記しておきたい。

以上の点を念頭に置き、いよいよ「東京図測量原図」に従って、芝公園あるいは芝増上寺周辺の地形環境をやや詳しく見ていくこととしよう。

2. 芝公園・芝増上寺周辺の地形環境

図の中央に芝増上寺の三解脱門（図中A、以下「三門」とする）がある。この三門前に本堂を背にして佇み、前方のJR浜松町駅方面を遠望すると、全体的に下っていることに気付く。より詳しく述べると、三門の石段を降りた辺りから芝増上寺前の松原（図中B）の手前までは概ね平坦であるが、松原付近、芝増上寺の正門に当たる大門（図中C）付近で傾斜の度合いを変えながら下り、さらに現在的大门交差点を少し越えた辺りからJR浜松町駅北側のガード下に向かって一挙に下っていく。そこで、具体的に数値をもって見ていくことにしよう。なお、残念ながらいま手元に、三門前・大門・大門交差点・浜松町駅北側ガード下を一直線で辿り得る標高のデータはないため、これらに近接する地点で獲得したデータを参考として見ていくことにしたい。

まず、三門前の標高については、三門の南方に位置する旧台徳院霊廟惣門付近（図中D）で得られた標高4.6mという数値が参考になろう。次に大門（図中C）付近について見ると、港区役所付近（図中E）で得られた標高2.1mの値に近い。おそらく、芝増上寺前の松原（図中B）も、この数値と顕著な開

きはないと見てよさそうである。JR浜松町駅北側ガード下は、区内で最も標高の低い地点とされており、0.08mの値が得られている。その北方約250mに位置する旧港区立神明小学校付近（播磨赤穂藩森家屋敷跡遺跡）の計測値が標高1.7mであったことから、旧東海道に当たる第一京浜国道を東に過ぎた辺りから海に向かって急激に落ち込む地形であったことを窺うことができる。勿論、これらの数値は現在の標高である。一般的に港区内の土地は、台地、低地にかかわらず、江戸時代以降、複数の地表面の嵩上げが行われており、江戸時代の各時期あるいは明治期の地表面は、現在の地表面下に見られる盛土層⁷⁾の中に存在する。そこで、先の旧台徳院霊廟惣門付近（図中D）、港区役所付近（図中E）で観察された江戸時代の地表面の標高を見ていくと次のようになる。

旧台徳院霊廟惣門付近（図中D）の数値は、台徳院霊廟跡地に相当する増上寺寺域第2遺跡の発掘調査で得られた。実は台徳院霊廟惣門は、もともと現在地から40m程西方に建てられていた（図中D'）が、昭和35年（1960）のゴルフ場建設時に現在地に移された。発掘調査は旧台徳院霊廟惣門裏手から、かつて台徳院霊廟の勅額門（図中F）が存在した区画を対象に行われた。その結果、台徳院霊廟整備前の地形が観察され、惣門を曳き家により移動した際のコンクリート構築物、惣門から勅額門に至る参道沿いに奉献された燈籠の基礎等が検出されている。⁸⁾

台徳院霊廟整備前、ここには、谷が、ほぼ東西方向に入り込んでいたことが確認されている。台徳院霊廟の参道は、この谷地形を整備してつくられていたことが発掘調査によって明らかとなったのである。霊廟整備時、旧台徳院霊廟惣門付近（図中D）の標高は2.4m前後であった。さらに、惣門旧地から勅額門に至る間（D'-F）に設置された燈籠の基礎の上面で2.9m程、燈籠基礎のうち地上に顔を出していた部分はせいぜい10cm程であったから、燈籠が建てられた参道周辺の標高は2.8m程であったと考えられる。すなわち、西に向かってやや上っていく旧地形である。

台徳院霊廟は寛永9年（1632）に造営され、燈籠の奉献も多くが寛永9年であった。さらに、少なくとも考古学的所見では燈籠基礎が嵩上げされた形跡が見られなかったことを考えると、ここに示した数値は、この時期の標高を示しているとして差し支えないだろう。残念ながら調査区画に隣接する現在の増上寺境内との高低差等を知る術を目下のところ持ち合わせていないが、調査区画内に谷が存在した事実や、惣門前に構築された下水溝の石組壁の上端が増上寺側で高くなっている可能性があることなどから、現在は一見平坦に見える増上寺三門の後方域は江戸時代、台徳院霊廟惣門周りに比して多少なりとも高かったことが推測される。

一方、芝増上寺三門の前面の様子はどうかであらう。港区役所建て替えの折に発見された増上寺子院群遺跡のうちの光学院・貞松院跡及び源興院跡の発掘調査によって、自然堆積層の上端が標高0.5～1.3mで、さらに標高1.8m付近で宝永テフラが検出されている。宝永テフラは、宝永4年（1707）に起きた富士山の噴火によって発生した火山灰で、増上寺子院群遺跡では、降灰当時の様子を留めた状態で検出されており、18世紀初頭の地表面がおおよそ標高1.8mであったことが確認された。¹⁰⁾ 台徳院霊廟惣門周りとは75年の隔たりはあるものの1mを超える比高差が見られ、現状地盤の標高差を考えると三門前との開きはさらに大きかったことが予測される。

芝増上寺は、飯倉台地の東の末端（三田段丘の北端とも）を雛壇状に改変した土地の上に立地している。この付近の台地（段丘）は、標高が20m前後で推移し、¹¹⁾ 東側に広がる沖積低地に向かって下る流れ

によって幾筋かの谷が刻み込まれていた。台徳院靈廟惣門から勅額門に至る参道は、その谷間に整備されたのである。

また芝増上寺境内の北には、俚俗に宇田川あるいは桜川と呼ばれる大下水が構築されているが、その分流が芝増上寺子院群の東側を南下している（図中G）。目を芝増上寺境内の南に転ずると、台地（段丘）直下に下水がめぐらされ、その南方に、江戸時代に整備された古川がある。芝増上寺方丈跡に開校した港区立御成門中学校の校庭で発見された増上寺寺域第1遺跡の発掘調査で、この付近が台地（段丘）北端に当たる可能性が高いことも確認されており、芝増上寺境内の南北は、いずれも台地（段丘）¹²⁾が落ち込む地形環境にあったことが理解される。

飯倉台地の東端（または三田段丘北端）は、「切通し」と称される鞍部を経て愛宕山に向かい、その北端で沖積層低地に向かって下っていくが、芝増上寺境内が切通しを越えることはなかった。

3. 芝増上寺・芝公園周辺の地形から読み取れること

上述のように芝増上寺は、西方の台地（段丘）、北・南・東を川筋あるいは大下水によって、截然と区画された空間の中に存在した。芝増上寺境内に重なる芝公園もまた、この区画の在り方と無関係ではないだろう。

さらに境内を俯瞰すると、本堂等寺院本体が展開する空間、徳川將軍家墓所が造営されている空間と、子院・学寮が設けられた空間の間には、厳然とした区別が存在したことも予測される。適切な喩えとはいえないかも知れないが、本堂等寺院本体及び徳川將軍家墓所のある空間を舞台、子院・学寮の在る空間を客席になぞらえれば、この空間を劇場空間に見立てることもあながち不可能ではないように思われる。松原は緞帳の役目を負い、台地（段丘）を舞台の背景とする見立てである。徳川將軍墓は舞台の最も高所に居並ぶ役者といったところであろうか。実はこの空間観は、柴井町、宇田川町辺り（現、港区新橋六丁目から浜松町一丁目）から東海道を南下し、現在の大門交差点を右折した後、大門から芝増上寺に進み入る將軍葬儀の際の葬列の道程からも窺うことができる。¹³⁾

さて筆者は、芝増上寺と芝神明とは空間観において異なるとする立場にある。上述の見立てからすると芝神明は劇場外に位置することになるが、この空間観の相異を示す近代初頭の史料を掲げて、本稿を閉じることとしたい。

東京都公文書館蔵「講社及教院遷座遙拝私祭社堂並葬儀〈社寺掛〉」（請求番号606.A5.01）に、「本院大講ヨリ出火、神殿焼失ニ付、其刻及御届候通四神御霊代ハ府社芝大神宮へ仮遷座致置候処、市塵愚塵之境ニ候間、更ニ神殿落成迄郷社芝東照宮へ遷座、・・・（後略）」（傍線、引用者）とある。この史料は明治7年（1874）1月4日付で、大教院権大教正鵜飼鉄定・鴻雪爪から教部省に提出されたもので、芝増上寺内に設けられた大教院神殿に預けてあった「四神御霊代」を、神殿焼失に際して芝大神宮に遷したものの、この地が猥雑な空間と隣り合っていることから、芝東照宮へ預けるというもので、芝増上寺（芝東照宮は神仏分離令までは、芝増上寺境内の一画）と、芝大神宮（芝神明）及び周辺域との空間観の相異を窺い知ることができよう。

おわりに

本稿では、芝公園・芝増上寺をめぐる空間的特性を、遺跡の考古学的調査の成果を加味しながら、地形環境の側面から眺めてみた。些か雑駁ではあるが、筆者は本稿で、芝増上寺が芝地域の中で厳然とした空間として位置付けられるとする見方の一端を披歴した。近代に入り、少なくともその前半は、芝公園はこの空間的特性を継承する形で変遷したと思われる。

ところで、翻って考えてみれば、都市・江戸の重層的な展開の在り様を明らかにしたのは、江戸・東京史研究に本格的に関与するようになって四半世紀が過ぎようとしている近世考古学であった。このことは、歴史研究の中で地域的特性を焙り出そうとする際、地下の状況を含めた立体的な視野をもつ必要があることを明示している。芝地域の研究が今後、地形環境の変化を含め、より幅広い視点から深化することを願ってやまない。

本稿を草するに際し、斉藤進氏（東京都埋蔵文化財センター）、渋谷葉子氏（徳川林制史研究所）、石田七奈子氏（総合研究大学院大学）から御教示・御助力を頂いた。深甚の謝意を表するものである。

註

- 1) 『港区史 上巻』（東京都港区役所、1960年）など。
- 2) 17世紀前半の汀線は、白杵市立白杵図書館所蔵「寛永江戸全図」（寛永末期、之潮、2007）等から推測することができる。また、『増補港区近代沿革図集 新橋・愛宕・虎ノ門・芝公園・芝大門・浜松町・海岸』（港区教育委員会、2009年）、『増補港区近代沿革図集 芝・三田・芝浦』（港区教育委員会、2007年）、『増補港区近代沿革図集 高輪・白金・港南・台場』（港区教育委員会、2008年）により、芝地域の海浜部埋め立ての過程が概観できる。
- 3) 東岸については、汐留遺跡の発掘調査によって「前島」の呼称をもつ微高地の一面が検出され、その状況から日比谷入江の東岸もしくは東岸付近と考えられている（東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅰ』（東京都埋蔵文化財センター、2000年））。また西岸及び埋め立ての様子は、愛宕下遺跡の発掘調査によって解明されることに期待がもたれている（例えば、石崎俊哉「発表8 港区 愛宕下遺跡」（『東京都遺跡調査・研究発表会 35 発表要旨』東京都教育委員会、2010年））。
- 4) 増上寺子院群遺跡の地理的環境を分析した町田洋は三田段丘の北端と記している（町田洋「第三節 遺跡の地層と宝永火山灰について」『芝公園一丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡－港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書－』東京都港区教育委員会、1998年）が、港区の弥生時代遺跡の分布状況を分析した下島綾美は飯倉台地の東端と理解した（下島綾美・高山優『港区の先史時代Ⅱ 港区の弥生時代』港区考古学ブックレット4（港区立港郷土資料館、2012年））。
- 5) 註4）町田洋の論考に同じ。
- 6) 港区教育委員会事務局『薩摩鹿児島藩島津家屋敷跡第1遺跡発掘調査報告書』港区内近世都市江戸関連遺跡調査報告24、住友不動産株式会社、2002年。
- 7) 盛土層の厚みは場所によって異なるが、数cmから数mに及ぶ場合もある。
- 8) 港区教育委員会『増上寺寺域第2遺跡発掘調査報告書』西武鉄道株式会社、2006年

- 9) 本項での標高は、全てT.P. (Tokyo Peil) を基準としている。なお本稿では、自然災害による地盤変動は考慮していない。
- 10) 鈴木公雄他『芝公園一丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡—港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書—』東京都港区教育委員会、1998年
- 11) 大塚初重・梅沢重明「東京都芝丸山古墳群の調査—丸山古墳の実測調査と第一号墳・第四号墳の発掘調査—」（『考古学雑誌』第五十一巻第一号、日本考古学会、1965年）
- 12) 高山優・磯部優子「増上寺寺域第1遺跡の発掘調査」（『港区文化財調査集録』第2集、東京都港区教育委員会、1994年）
- 13) 『平成21年度港区立港郷土資料館特別展 増上寺 徳川家霊廟』港区立港郷土資料館、2009年